

(6) 治水・開拓の歴史と屋敷構え～水と生き、農地を開拓した先人たち～

【関連文化財群のストーリーと特色】

斐伊川はかつて、神戸川とともに神門水海を経て日本海に注いでいましたが、中世末から近世初頭にその流れを完全に東に変えました。その後、寛永期に松江藩によって若狭土手が築かれると斐伊川東流は恒久的なものになり、現在のように宍道湖・大橋川・中海を経て日本海に注ぐようになりました。

これと前後して、斐伊川上流域の奥出雲では砂鉄を用いた「たたら製鉄」が隆盛を迎えます。その砂鉄採取は「鉄穴流し」という多量の土砂を下流域に流す方法で行われました。このため、流下した土砂により下流域では平野が拡張する一方で、斐伊川は天井川となり度々水害が起きました。

しかし、先人たちは氾濫した土砂を利用して堤防を築き、人工的に川を付け替え(川違え)、高瀬川などを開削し、斐伊川が注ぐようになった宍道湖周辺において新田開発を進めました。元禄2年(1689)に松江藩により綿の栽培が奨励されると、18世紀以降には木綿栽培が農民の貴重な副収入源として本格的に行われるようになります。平田地域では18世紀後半に木綿の生産が盛行し、木綿市も開かれ町が栄えました。そして19世紀に入ると、松江藩の他国売り木綿の4割を平田の木綿が占めるようになります。

これらの物産は、斐伊川や神戸川、高瀬川、平田船川などの舟運、さらには宍道湖や日本海、街道を通じて、大坂などへ出荷されました。

加えて、新田開発に伴って築地松を備えた散居集落が形づくられました。特に、築地松は、屋敷の周囲の土居(築地)を固めると同時に、北西の強い季節風から屋敷を守る役割を担い、出雲地方独特の景観を今に伝えています。

また、米の増収を図るため、高畝栽培による米作りが行われました。この耕作は幕末に「カナリ法」として考案されて以降、明治期に出雲平野一帯で普及する特徴的な農法であり、使用されていた農具は斐伊川文化会館に保存展示され、県指定有形民俗文化財として今に伝えられています。

「治水・開拓の歴史と屋敷構え」は、近世以降の斐伊川改修とそれに伴う新田開発や集落の形成、高瀬川、平田船川などの水運に係る関連文化財群であり、災害に立ち向かいながらも、水と共に生きた歴史文化や生業、独特の散居集落を体感することができます。

【主な構成要素(歴史文化)】

■有形：もの

- ★原鹿の旧豪農屋敷
- ★出雲屋敷(出雲文化伝承館)
- ★高畝栽培の農具(斐伊川文化会館)
- ☆築地松、茅葺き民家、屋敷
- ☆開拓者(大梶七兵衛ほか)の碑
- ☆斐伊川放水路

■無形：こと

- ☆先人(大梶七兵衛)の偉業の伝承

など

■その他

- ☆斐伊川
- ☆宍道湖・神西湖周辺の開拓

など



原鹿の旧豪農屋敷



出雲屋敷（出雲文化伝承館）



図 3-8 「治水・開拓の歴史と屋敷構え」における主な構成要素（歴史文化）

(7) たたらや鉱山とともに生きた足跡～鉄や銅などをつくり運び出してきた歴史文化～

【関連文化財群のストーリーと特色】

田儀櫻井家^{たぎさくらいけ}によるたたら製鉄は江戸時代初期から約 250 年にわたり続き、盛衰はありましたが出雲西部地域の一大産業として、出雲市多伎町^{たき}にとどまらず出雲市佐田町^{さだ}や大田市など隣接する一帯のたたら場を経営しました。そして、松江藩の庇護のもとに、神門郡^{かんもん}の地場産業として発展するとともに、生産した鉄製品^{てつせいひん}（割鉄^{わりてつ}、銃^{ずく}）が口田儀^{くちたぎ}から北国、大坂（現在の大坂）、九州北部などに積み出され、各地で鍋や釜、農具などに加工され、地域の経済や生活を支えました。

田儀櫻井家の中心施設が集中する宮本鍛冶山内遺跡^{みやもとかじさんない}や、主要なたたらである越堂^{こえどう}たたら跡・聖谷^{ひじりだに}たたら跡・朝日たたら跡は、「田儀櫻井家たたら製鉄遺跡」として国史跡に指定されています。

田儀櫻井家の本家である櫻井家^{さくらい}（現・奥出雲町上阿井）、糸原家^{いとはら}（現・奥出雲町大谷）、田部家^{たなべ}（現・雲南市吉田町）は、奥出雲の三大鉄師として知られています。このうち田部家のたたら製鉄の経営は、雲南市に近接した佐田町の須佐地区（旧飯石郡域）にも及んでおり、現在でも田代^{たしろ}たたら跡、郷城^{ごうじょう}たたら跡を確認することができます。また、堂ノ原^{どうのはら}たたら跡は、田儀櫻井家と田部家によって共同経営されたことが知られています。

出雲においては、たたら製鉄だけでなく採鉱も盛んに行われました。島根半島（北山山系）の鰐淵^{からかわ}から唐川^{うど}・鵜峠^{うと}にかけての地域一帯は、地下資源の宝庫で、鰐淵鉱山跡、鵜峠鉱山跡、鷺銅山跡があります。特に、鷺銅山は江戸時代の『石見銀山旧記』によると石見銀山発見のきっかけになったとされています。これら鉱山で採鉱された銅などは、近隣の鷺浦^{さぎうら}や鵜峠、河下^{かわしも}から積み出されたようです。

また、この一帯の鉱山では、石膏の採掘も行われ、昭和 30 年代半ばには国内最大の産出量を誇る石膏鉱床群とされていましたが、輸入原料と競合できず、昭和 40 年代から 50 年代に相次いで閉山となりました。こうした鉱山・採掘の歴史を伝えるため、鵜鷺コミュニティセンターでは鵜峠鉱山で使用されていた鉱山用具、坑道図面、鉱物標本などが保存・展示されています。さらに、最近の調査では、多伎地区において終戦間際に操業を始めた砂鉄鉱山である久村鉱山跡の詳細が明らかになりつつあります。

「たたらや鉱山とともに生きた足跡」は、近世から近代のはじめにかけて行われた鉄や銅などの生産、運搬などにちなんだ関連文化財群であり、これらの歴史文化遺産を通じて、近世のたたら製鉄の一貫した工程とそこでのくらし、島根半島（北山山系）における鉱山の足跡、そして流通・交易などの歴史文化をうかがい知ることができます。

【主な構成要素（歴史文化）】

■有形：もの

- ★田儀櫻井家たたら製鉄遺跡（宮本鍛冶山内遺跡、越堂たたら跡、聖谷たたら跡、朝日たたら跡）
- ★郷城桂の木（郷城たたら跡）
- ☆その他の製鉄関連の遺跡（屋敷谷^{やしきだに}たたら跡、掛樋^{かけひ}たたら跡、草井谷^{くさいだに}鍛冶屋跡など）
- ☆島根半島の鉱山跡（鷺銅山跡、鵜峠鉱山跡、鰐淵鉱山跡）
- ☆久村鉱山跡
- ☆口田儀の港・町並み
- ☆島根半島の港

など



越堂たたら跡



久村鉱山跡



(8) うみとかわの恵み～水辺の生業～

【関連文化財群のストーリーと特色】

日本海や斐伊川、神戸川、宍道湖、神西湖などは、交易・交流のみちとしての役割とともに自然の恵みをもたらし、生業としてくらしを支えてきた基盤でもあります。

日本海においては漁業が盛んに行われ、島根半島の“浦”と呼ばれる入り江では漁港と集落が形成され、北前船の影響も受けながら、独自の生活文化・食文化が形づくられてきました。また、^{きたまゑふね}十六島のりは『出雲国風土記』にも取上げられているほか、松江藩主に献上されたものが将軍家へ贈答されたという歴史のある特産品です。

宍道湖では、宍道湖七珍(シジミ、スズキ、モロゲエビ、ウナギ、アマサギ、シラウオ、コイ)などの魚介類が、多様な漁法により捕られています。

かつての神門水海の名残である神西湖は、周囲約5km、水深が1.5mの小さな汽水湖であり、ボラ、マハゼ、ウナギ、エビ、フナなどが捕られます。

宍道湖、神西湖ともに中心となる漁はシジミ漁です。宍道湖では船の上からシジミを捕る手掻ぎ操業が行われていますが、神西湖では資源保護の観点から、湖の中に入り後ろ向きで歩きながらシジミを捕る漁法が行われています。神西湖での単位面積あたりの漁獲量は約220t/km²と非常に高く、宍道湖の倍以上にもなります。

神戸川では落ちアユの時期になると、中流域で大型の四角い網でアユをすくい取る四つ手網漁が行われます。落ちアユを四つ手網で捕る漁は神戸川固有の伝統漁法であり、全国的に誇れる文化遺産です。一方、下流域では、ウナギ、モクズガニ、汽水域ではシジミ漁も行われています。なお、神戸川で使用された漁労関連の道具は民俗資料として今に伝えられています。

神戸川や神西湖の漁は太古の昔から行われていました。^{かみながはま}上長浜貝塚ではシジミの貝殻や魚の骨が多数見つかったほか、海水を利用した塩づくりで使われた製塩土器が出土しています。こうしたことから、この地の水辺の生業は、古代まで遡る歴史を有することが裏付けられています。

「うみとかわの恵み」は、日本海、宍道湖・神西湖、斐伊川・神戸川など“水辺”の産物にちなんだ関連文化財群であり、古代から現在に至るまで豊かな“水辺の恵み”を受けてきた歴史文化をうかがい知ることができます。

【主な構成要素(歴史文化)】

■有形：もの

- ★猪目洞窟遺跡の出土品(サザエ、アワビなど)
- ★矢野遺跡(矢野貝塚)
- ★鰐淵寺文書ほか(十六島のりの礼状)
- ☆上長浜貝塚
- ☆御領田遺跡^{ごりょうでん}
- ☆漁港
- ☆伝統的な特産品(十六島のり、杵築の干アワビ、^{こいづ}小伊津の甘鯛、シジミ、ワカメほか)
- ☆漁労関連の民俗資料

■無形：こと

- ☆伝統的な漁(海)：地引網、定置網、刺し網、一本釣り
- ☆伝統的な漁(湖、川)：宍道湖・神西湖のシジミ漁、神戸川の四つ手網・アユ漁、十六島のり(摘み取り)
- ☆食文化：棒だら料理、海苔雑煮…平田、鮎寿司…佐田

など



十六島



神西湖のシジミ漁

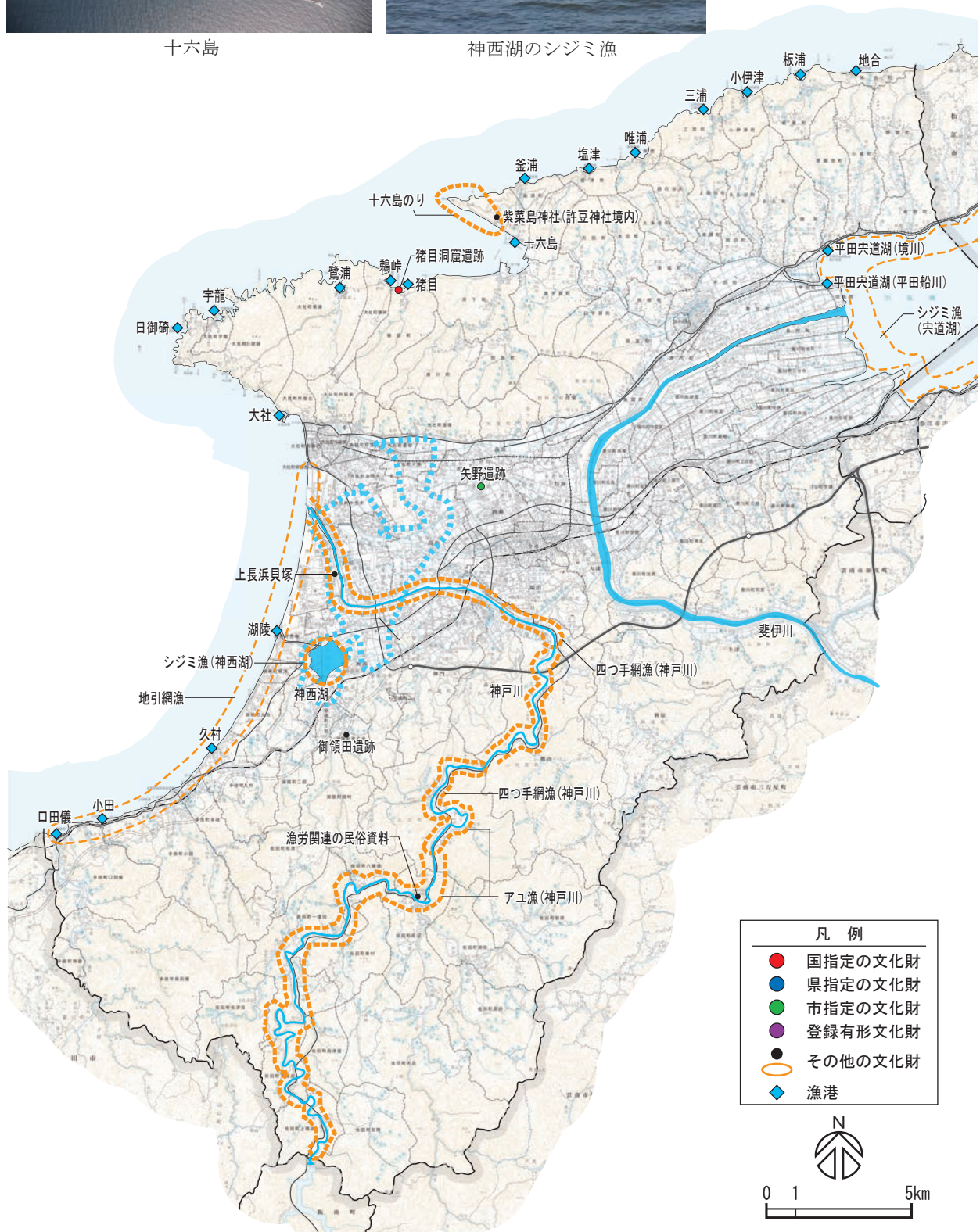


図 3-10 「うみとかわの恵み」における主な構成要素(歴史文化)

(9) 地域に息づく民俗芸能や習俗～神々のふるさとのくらしの文化～

【関連文化財群のストーリーと特色】

出雲市には、重要無形民俗文化財の^{おおどち}大土地神楽をはじめ、^{さきた}埼玉神社青獅子舞や須佐神社の念仏踊りなど7件の県指定の無形民俗文化財、^{あらがや}荒茅盆踊りや野尻大年神社獅子舞など24件の市指定の無形民俗文化財があり、指定されたものは全体で32件となります。

これに各地区の大半で継承されている民俗芸能など未指定の無形民俗文化財を含めると、把握しているものだけで535団体、祭り等の数は663件に及んでいます。(平成23～25年度に出雲市が行った「市内伝統芸能保存団体支援活性化事業による伝統芸能調査」P66参照)

民俗芸能等の種類としては、とんど、神楽、獅子舞、盆踊りなど多岐にわたっています。

とんどは、1月の中旬、小正月頃に今でも多くの地区で行われています。出雲地方では「とんどさん」とも呼ばれ、竹を組み、正月に使った門松やしめ縄、古い御札、書き初めなどを置いて火をつけ、最後に餅を焼きます。また、とんどの煙をかぶると風邪をひかないという言い伝えも残っています。

華やかな衣装や演出で「見て楽しい神楽」と人気の高い石見神楽と比較して、出雲神楽は「おとなしく素朴」と評されますが、多くの神楽団体が神話にちなんだ伝統の舞を今に守り継いでいます。出雲神楽の全体構成は、前段に素面のまま採物を持って舞う「^{しちざ}七座」、それに続いて祝福を意図する儀式的な舞「^{しきさんば}式三番」、後段に着面による演劇舞「^{しんのう}神能」があることが基本的な特徴とされています。

獅子舞は、神社の神事として行われ、埼玉神社、^{うが}宇賀神社、^{みたに}三谷神社などそれぞれに独特の形態があります。

盆踊りは、各地で祈願のために行われた念仏踊りが起源であるといわれ、それぞれの土地にちなんだ歌詞や踊りが継承されています。

「地域に息づく民俗芸能や習俗」は、これら無形民俗文化財を中心とした関連文化財群であり、神々のふるさとに息づく神楽や舞などの伝統的な行事・習俗などを見て、知って、学ぶことができ、観光や交流の資源としても生かされています。

【主な構成要素(歴史文化)】

■有形：もの

★大社町の^{きつちようばん}吉兆幡

★神楽面、獅子頭、衣装、楽器、能本など

☆神楽や獅子舞などの舞台(神社など)



大社町の吉兆幡

■無形：こと

★大土地神楽

★埼玉神社青獅子舞

★須佐神社の念仏踊り

★多久神社のささら舞

★大社町の^{きつちようしんじ}吉兆神事

★野尻大年神社獅子舞

★佐志武神社奉納神事華

★平田一式飾

★河下盆踊り

など



大土地神楽

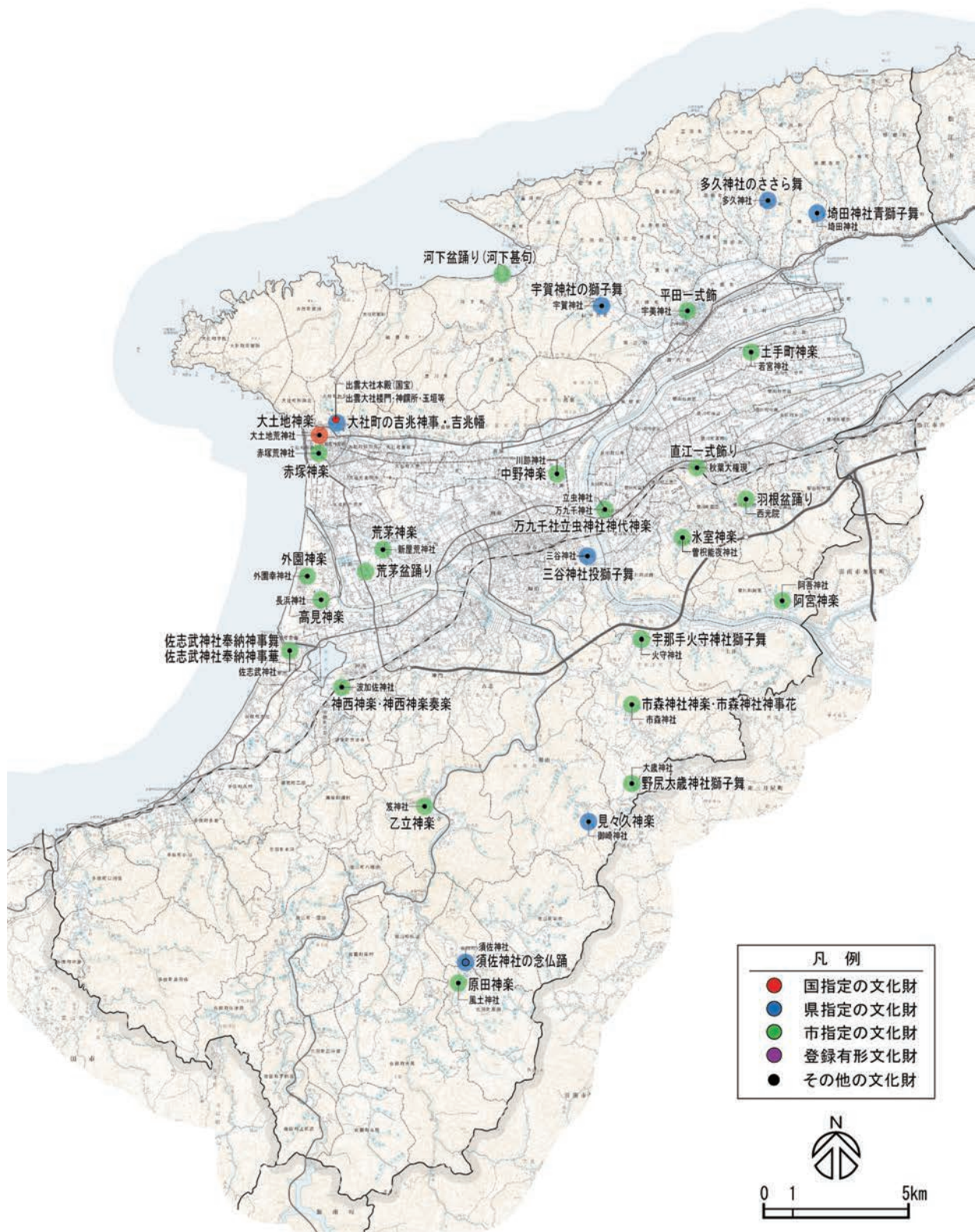


図 3-11 「地域に息づく民俗芸能や習俗」における主な構成要素(歴史文化)

(10) 出雲の文芸と学問～出雲大社の社家や旧家、私塾跡などからたどる文化～

【関連文化財群のストーリーと特色】

出雲では、江戸時代、民間を中心に文芸や学問を学ぶ気運が高まり、多方面で人材を輩出しています。

出雲は和歌発祥の地として知られています。戦国期には千家、北島両国造家ではおのおので歌会が開かれていたようで、この潮流が江戸時代の和歌発展につながり、出雲歌壇は花開きます。米子の竹内時安斎岑延^{たけうちあんさいみねのぶ}によって編まれ、元禄 15 年(1702)に出雲大社に奉納された歌集『清地草』^{すがぐさ}には、出雲をはじめ全国の歌人の歌が掲載されています。また、江戸の僧であり歌人である明珠庵釣月^{みょうじゅあんちようげつ}(1659-1729)は、宝永年間(1704-11)に出雲へ下向し、江戸中期のこの地で、二条流和歌を広めました。江戸後期に入ると、本居宣長^{もとりのりなが}(1730-1801)に学んだ出雲国造家の千家俊信^{せんげとしざね}(1764-1831)が出雲に宣長による国学をもたらしました。俊信は幕末の出雲(大社)歌壇に鈴屋流を導入して和歌盛隆の基礎を築き、私塾「梅廼舎」^{うめのや}では多くの門人を育てました。その後、明治の初めころまでは、千家尊孫^{せんげたくひこ}(1796-1873)や富永芳久^{とみながよしひさ}(1813-1880)の活躍により出雲歌壇は全国的にも注目される存在となっていくます。

江戸中期には、俳人・中島魚坊^{なかしまぎよぼう}(1725-93)が出雲坂田村(現・出雲市斐川町)の豪農・勝部本右衛門を頼り出雲に移ったことなどが素地になり、出雲では幕末に俳句も庶民の間で盛んになり、明治から昭和にかけて活躍した俳人・原石鼎^{はらせきてい}(1886-1951)を輩出しています。また、詩人・歌人・随筆家である大町桂月^{おおまちけいげつ}(1869-1925)が、わずかな期間ですが中学校教師として赴任しています。

このほか、国南画の大成者である池大雅^{いけのたいが}(1723-76)や画僧の風外^{ふうがい}(1779-84)が来雲し勝部家との親交を深め佳作を残したことは、当地の文化人の審美眼の高揚に尽くすこととなりました。

こうした出雲における文芸と学問の発展に出雲大社の社家や旧家が大きな役割を担ったことは、手銭家に残された美術工芸品や文書など(手銭記念館に収蔵・展示)からもうかがい知ることができます。

このほか、出雲の学問の発展に貢献した人として、鳴滝塾^{なるたきじゅく}でシーボルトから西洋医学を学んだ西山砂保^{にしやますなほ}(1781-1839)、上塩冶村に有隣塾^{かみえんや ゆうりんじゅく}を開いた伊藤宜堂^{いとうぎどう}(1791-1874)、英語学校の包蒙館^{ほうもうかん}を開いた勝部其楽^{かつべきらく}(1846-1933)らが挙げられます。

明治 5 年(1872)に「学制」が發布されると平田の石橋孫八宅に郷校が開設され、翌明治 6 年(1873)には旧郡屋(村役人の集会所)に平田一番小学が開校します。これが県内で最初の小学校の開校になります。また、雨森精翁^{あめのもりせいおう}が明治 11 年(1878)に平田町に開いた漢学塾亦楽舎^{えきらくしゃ}は、中学校として地方の教育を補いました。

県立出雲高等学校には全国的にも珍しい平田植物園^{きゅうちようえん}(久徴園)がありますが、これは植物学者・平田駒太郎^{ひらたこまたろう}が教材として植栽したのがはじまりで、大正 8 年(1919)に命名されました。平田駒太郎^{たちくえきよう}は立久恵峽を愛した学者でもあり、ここには遺骨塔がつくられています。

「出雲の文芸と学問」は、近世・近代における出雲の文芸や学問に係る関連文化財群であり、文芸や学問から出雲市や地域の歴史文化の特色などを学ぶことができます。

手銭記念館



【主な構成要素(歴史文化)】

■有形：もの

- ★石橋家住宅
- ★いなさ会館(旧島根県立第三中学校講堂)
- ★佐田町八幡原「岩崎家文書」(医療関係資料)
- ☆梅廼舎跡(都稲荷社前)
- ☆包蒙館跡

- ☆有隣塾跡
- ☆手銭記念館・手銭家文書
- ☆西山砂保の墓
- ☆平田植物園(久徴園：大町桂月の碑…)
- ☆秦家文書(塩冶神社文書)
- ☆富永家文書
- ☆その他和歌関連文書(多伎藝神社文書ほか) など

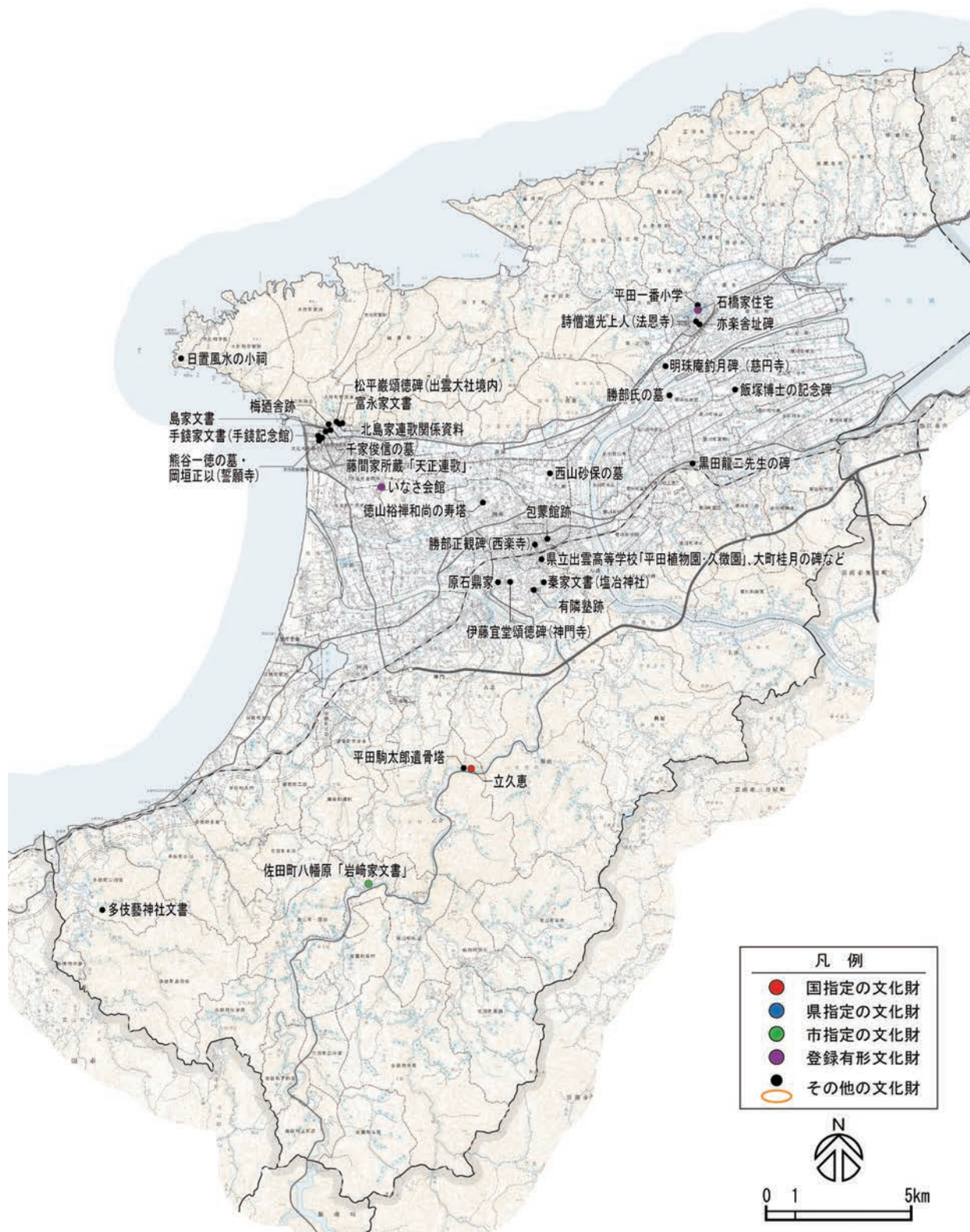


図 3-12 「出雲の文芸と学問」における主な構成要素(歴史文化)

(11) 海・川・陸のみちと町場の形成～多様な交通手段を生かした交流・交易とくらし～

【関連文化財群のストーリーと特色】

出雲市は、海、川、湖、平地、山地、半島など多様な地形条件を備えており、こうした条件を利用し、一方で克服しながら、水運(海、川・湖沼)や街道を通じて、交易・交流を行い、集散地などの町場を形成してきました。

水運についてみると、西日本海地域においては、平安末、鎌倉期以来の津や市が発展し、内陸交通とも結びついて、室町末、戦国期には多数の港湾都市を成立させることになりました。当時の史料から、出雲国では平田、杵築、安来、白潟^{しらかた}などが確認されています。また、近世初頭の商人・平田屋惣右衛門^{ひらたやそうえもん}は、毛利輝元に請われ、16世紀末の広島城築城と城下町建設に携わりました。港湾都市・平田で培った技術を、広島^{えぞ}の町割、運河の開削などに生かし、その名は町名(平田屋町)や運河の名称(平田屋川)となりました。

さらに、海上交通(海のみち)は、江戸時代の18世紀末に蝦夷地^{えぞち}と大坂を日本海経由で結び、各寄港地で製品の買い付けを行う北前船が登場すると、この地では宇龍^{うりゅう}や鷺浦が風待ちの寄港地として栄えました。また、口田儀は近世において鉄の集散地、積出港として発展しました。

宍道湖を含めた舟運(川のみち)は、斐伊川や神戸川、高瀬川、平田船川、堀川などで行われました。

陸上交通である街道・往還(陸のみち)は、主なものとして山陰道や斐伊川、神戸川沿いの中国山地・山陽方面への街道、出雲大社・鰐淵寺^{いちはた}・一畑寺への参詣道などがあります。このうち古代山陰道は、律令国家の成立後に本格的に建設された七道(行政区、幹線道)の一つであり、ルートの変更を伴いながら近世山陰道へと移行しました。そして、近世山陰道は東西方向の基幹街道としての役割を担い、現在の国道9号へと継承されました。

これらのみちと産業などが関連して、前記の港、木綿の集散地や木綿市、出雲大社とその周辺に、町場や集落(集住)が形成され、今に引き継がれています。特に、平田の「木綿街道」、出雲大社の門前町、鷺浦・小伊津をはじめとする島根半島の浦、口田儀では歴史的な風情を感じる町並みが残されています。

「海・川・陸のみちと町場の形成」は、北前船をはじめとした海上交通、斐伊川や神戸川、平田船川などにおける舟運、そして街道を通じた交易・交流と形成された町場にちなんだ関連文化財群であり、物流の大動脈であった北前船をはじめとした海のみちや舟運、街道の面影、そして交易・交流を背景とした町場の歴史文化を迫体験できます。

【主な構成要素(歴史文化)】

■有形：もの

★出西^{しゅっさい}・伊波野一里塚^{いわのいちりづか}

★石橋家住宅

★藤間^{とうま}家住宅

☆藤間家文書

☆「木綿街道」(町並み：港湾都市として発展)

☆島根半島の港・集落(町場)：宇龍、鷺浦、十六島、小伊津

☆口田儀の港・集落(町場)

☆平田船川、高瀬川などの河川

☆旧山陰道・旧備後街道などの街道・往還など

■無形：こと

☆木綿市(杵築、今市、平田、直江)など



鷺浦の集落



平田船川

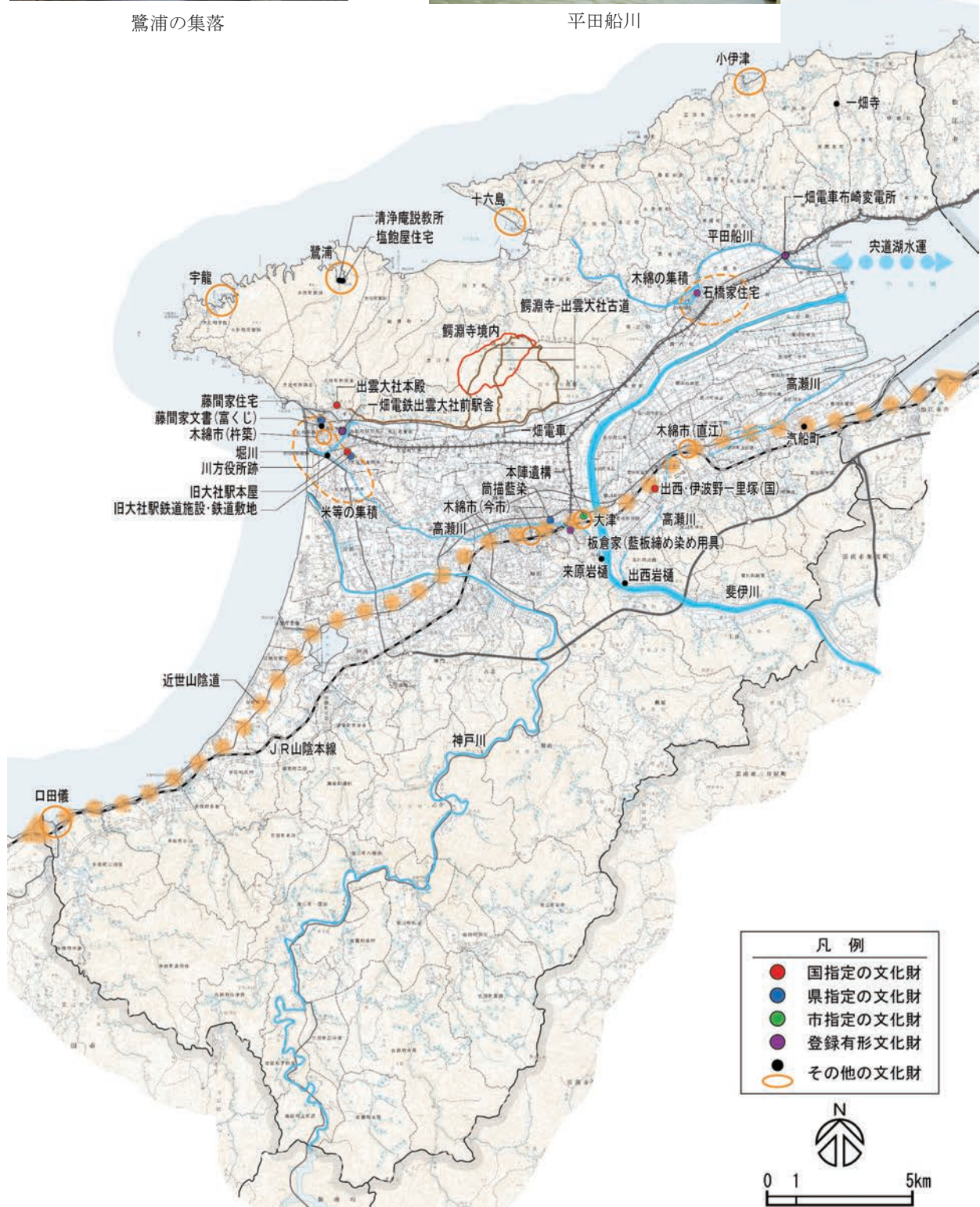


図 3-13 「海・川・陸のみちと町場の形成」における主な構成要素(歴史文化)

2 関連文化財群の保存・活用に関する取組方向

関連文化財群に関する文化財の保存・活用に関する取組方向を、次のように設定します。

こうした取組方向は、歴史文化保存活用区域における文化財の保存・活用においても考慮することとします。

なお、体制整備や教育・啓発、観光振興、まちづくりなどについては、「第6章」において、記述・再整理します。

■関連文化財群のテーマに関わる文化財の調査・研究

それぞれの関連文化財群のテーマに関わる内容をより深めるため、また、新たな構成要素を見つけるために、テーマを意識した継続的な文化財の調査・研究に取り組みます。

その際、文化財課による調査・研究(専門機関等への委託を含む)に加えて、文化財調査協力員をはじめ市民の協力による調査にも取り組みます。

■つながりを持った文化財の保存・活用

関連文化財群における文化財の保存・活用を、従来のように個別に行うだけでなく、“群”としての価値と特色を顕在化し、生かす視点も持ちながら、全体テーマ(基本理念)や個々のテーマに基づき、つながりを持った保存・活用に取り組みます。

具体的には、それぞれの関連文化財群をめぐるコースづくりに取り組むとともに、動線やサインの整備・充実、文化施設等(出雲弥生の森博物館、出雲文化伝承館、荒神谷博物館、島根県立古代出雲歴史博物館、平田本陣記念館、手銭記念館、コミュニティセンターなど)のほか、観光施設等(道の駅など)の活用や連携、関連するイベントの開催などを検討します。

■周辺環境を含めた文化財の保存・活用

関連文化財群を構成する文化財については、個別に周辺環境を含めた保存・活用を図るとともに、コースの設定やその沿道の景観の保全・形成(道路の美装化、出雲市景観計画の普及啓発など)、案内・説明への対応(案内板、観光ガイド)など相互ネットワークによる環境づくりに取り組みます。

また、未指定等の文化財の幾つかについては、個々の価値及び関連文化財群としての価値の顕在化などを通じて、指定・登録を検討します。

■関連文化財群に関わる情報の受発信

関連文化財群の意義や魅力、それを構成する文化財や文化財をめぐるコースなどについての情報を分かりやすく整理し、パンフレットやホームページなどによって情報を提供・発信するとともに、問い合わせ等に対応できる体制の確保に努めます。

■既存の文化施設等の充実とネットワークづくり

関連文化財群に関する展示や情報提供などを行うため、出雲弥生の森博物館や荒神谷博物館の充実を図ります。また、出雲文化伝承館、平田本陣記念館、多伎文化伝習館などの既存の文化施設、コミュニティセンターとのネットワークづくりに取り組みます。

■関連文化財群を支える体制づくり

市民等の協力と参加を得ながら、関連文化財群の保存・活用を進めていく体制づくりに努めます。その際、関連文化財群の内容や役割などを、市民等に簡潔に伝えとともに、関連文化財群に関する具体的な取組を明らかにし、賛同者・協力者、そして参加者・担い手を募ります。

■テーマ等を通じた広域的な連携の検討

広域的に展開する可能性のある風土記や治水、鉄、北前船、文芸などに関わる関連文化財群は、関係する市町(松江市、雲南市、大田市、奥出雲町など)と文化財の保存・活用などに関する連携を検討します。